

# 報 告 記

○教育センター,内地留学報告 ----- 165

○東山梨地区教育委員会連合会事業報告 ----- 175

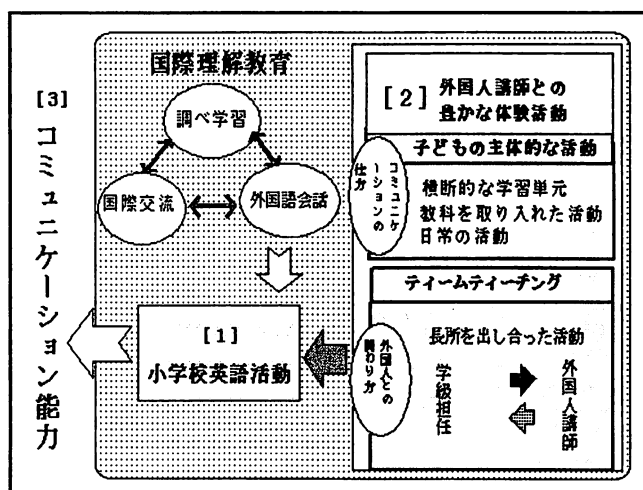
## コミュニケーション能力を育てる小学校英語活動に関する研究 —外国人講師との豊かな体験活動を取り入れた授業を通して—

### I 主題設定の理由

21世紀はグローバル化が進み、学校教育において児童に豊かな国際性とコミュニケーション能力を身につけさせることは極めて重要である。そこで、児童が英語に興味・関心を持ちながら、積極的に英語でコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するために、外国人講師と直接かかわる、子ども主体の体験活動の場を多く取り入れ、楽しく英語を学ぶことができる活動を取り入れることが必要であると考えた。

### II 研究の内容

小学校英語活動 [1] において、外国人と積極的にかかわり、英語で自己を表現する楽しさや、伝え合えた喜びを味わうことのできる、英会話を必要とする体験活動の場 [2] を多く設定することにより、進んで英語を活用する態度が育ち、外国人とコミュニケーションする力 [3] が育つことを目標のもと、その有効性を検証した。



### III 成果と課題

成果としては、単元を設定し豊かな体験活動を設定することにより、言語材料を絞り込み繰り返し使用しながら定着させていくことができたこと、また、活動に必要な言語や自分のありのままの気持ちを表現できる言語を扱ったことが、英語に対する意欲となり、伝え合うための工夫や努力の必要性を実感させることができたことである。

課題としては、学級担任が中心となった教材の開発と指導方法の確立、理解力、表現力の育成、外国人講師との連携があげられる。今後は、小中連携、学校全体としての指導計画を明確にしていくことで、子どもが英語に慣れ親しみ、成就感を伴うことのできる楽しい小学校英語活動をつくっていきたいと考える。

(玉宮小学校 本宮知子)

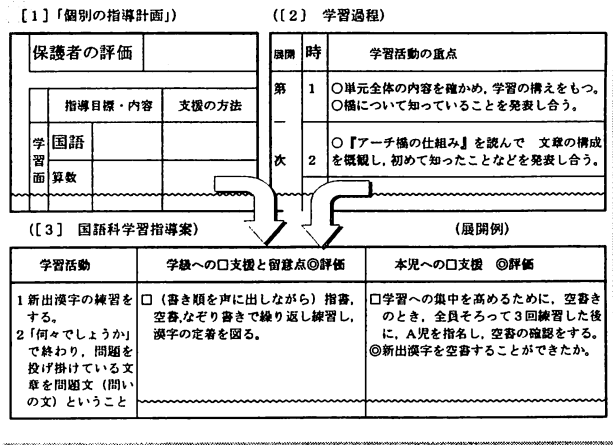
特別な教育的支援を必要とする子どもたちへの支援の在り方に関する研究  
 —通常の学級における「個別の指導計画」を活用した教科指導を通して—

I 主題設定の理由

子どもたちとのこれまでのかかわりの中で、子どもの実態に応じて支援を工夫していかなければならない必要性を感じるようになった。本研究では、「個別の指導計画」の活用に関心をもち、視点をのぞいた指導試案を作成し、その試案に基づく授業実践を通して、通常の学級において教科指導上困難を示す児童の指導の在り方を明らかにし、特別な教育的支援を必要とする児童への指導の充実に役立てたいと考えた。

II 研究の内容

対象となるA児について「個別の指導計画」[1]を作成し、それに基づいた「支援の方法」を小学校4年生の国語の学習過程[2]に取り入れ、[3]のような通常の学級における学習指導案を作成する。その学習指導案に基づいた授業を行い、特別な教育的支援を必要とする子どもたちへの支援の在り方を検証した。



III 成果と課題

**成果：**対象児が持つつまづきや困り感に寄り添いながら支援を考えていくことで、学習面及び授業中の行動面における変容が見られた。また、対象児のために考えたことは、通常の学級の多くの子どもたちにとってもわかりやすい授業につながったことが、授業の様子やプリント・「振り返りカード」などからもみることができた。「個別の指導計画」を活用した教科指導は、特別な教育的支援を必要とする子どもたちに対する支援の在り方の1つとして有効であり、きめ細やかな工夫が学級の他の児童にとってもわかりやすい授業につながったと思われる。

**課題：**「指導試案の改善」と「指導事例の蓄積」である。様々な障害のタイプ別の指導や様々な学年別の指導、様々な教科や特別活動などの指導を蓄積することで、指導試案の改善が行われ、障害別や発達段階別の指導の手立てを明らかにすることが可能となると考える。  
 （後屋敷小学校 新谷雅美）

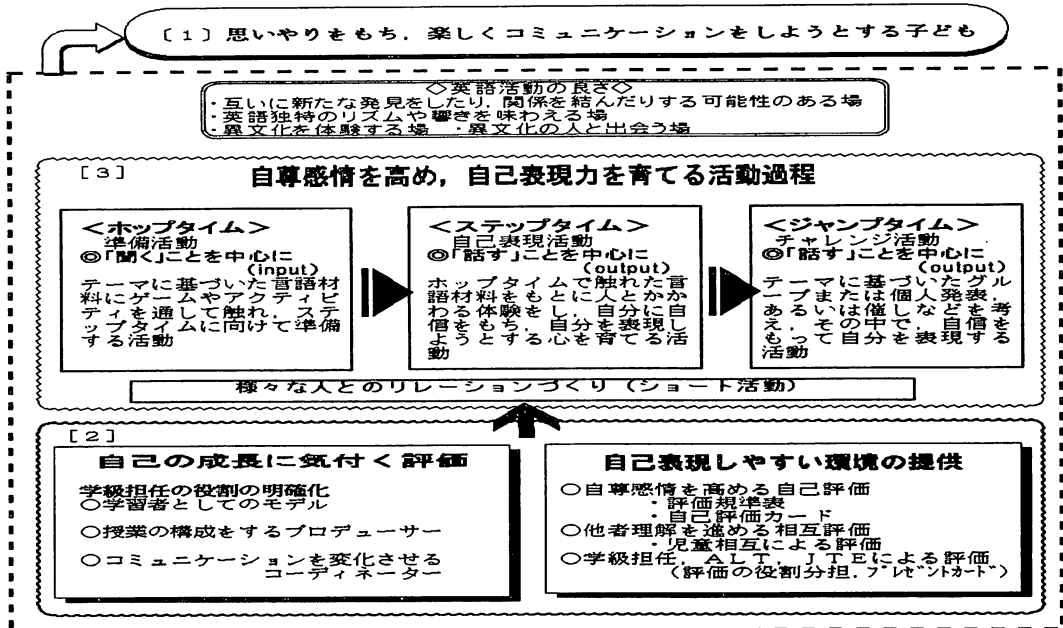
# 自己表現活動を取り入れた小学校英語活動 —学習環境づくりと評価の工夫を通して自尊感情を高める—

## I 主題設定の理由

様々な教育課題の中に、人とかかわろうとする気持ちすなわちコミュニケーションへの態度の育成がある。そこで、英語活動に自己表現活動を取り入れ、学級担任が中心となり自己を表出しやすい環境をつくったり、評価の工夫を行ったりすることで自尊感情を高め、進んで人とかかわろうとする気持ちをはぐくむことができると考えた。

## II 研究の内容

小学校5年生において〔1〕のような子どもを育てるため、〔2〕のような工夫をした英語活動モデル〔3〕を作成し、総合的な学習の時間において試行した。



## III 研究の成果と課題

本試行モデルを通し、子どもたちの自尊感情が高まり、進んで人とかかわり合おうとする気持ちをはぐくむことができた。これは、HRT、ALT、JTEの三者の役割を明確にし、それぞれのもつ特性を生かした学習環境を提供できたことや自己評価、相互評価により自己理解・他者理解を促したことによるものと考えられる。また、自分の良さや友だちの良さを調べ伝える活動内容であったため、さらに自己理解・他者理解が行われたと考えられる。今後の課題として、この試行モデルをもとに、自己表現活動を取り入れた英語活動の展開例を増やしていきたい。

(山梨小学校 小林みずほ)

## 小規模校における効果的な指導の在り方

－縦割り班活動や異学年との合同学習・交流学习を通して－

### I 主題設定の理由

小規模校においては、少人数であるため教師の目が行き届き、きめ細かな指導ができるという確かな利点がある反面、多様な考えを出し合い、思考を練り上げていくことが困難等の課題も多い。近年重要視されているコミュニケーション能力の育成についても、このような状況下にある小規模校においては、より大きな課題となってくる。

少子化による児童数の減少から小規模校化が進む昨今、小規模校の少人数故の課題点を探り、その課題を解消し、学習効果を高めていくための方策について考察していくことの必要性も増してきているものと考えた。

具体的には、その一手段として、全校合同学習やITを利用した交流、縦割り班活動の場の拡大が有効ではないかと考えた。

### II 研究の内容

- 1 文献等により、小規模校における教育の長所、課題を明らかにする。
- 2 文献等により、学級規模と学習効果との関連について調べ、小規模校の課題点を改善する方策について考える。
- 3 所属校へのアンケート調査により、全校合同学習の実施や縦割り班活動の取組の拡大による児童の変化の様子について調査する。
- 4 県内の小規模校（12校）に対するアンケート調査により、
  - (1)小規模校における児童、指導面の長所、課題を明らかにする。
  - (2)小規模校における合同学習、交流学习等の実施状況について調査する。
  - (3)全校合同学習の成果と課題について調査する。
- 5 ITを利用した学校間の交流の方法やその利点、留意点についてまとめる。
- 6 全校合同体育、音楽の年間指導計画（試案）を作成する。

### III 研究の成果と課題

この研究で、文献やアンケート調査を通して小規模校における児童、指導面の長所、課題を明らかにし、その課題点を解消するための方策を考えることができたように思う。特に学級規模別の学力調査の結果の分析等から、様々な人との交流機会を多く持つことの重要性について理解を深めることができたと思う。

今後は、小規模校のみならず、中規模校、大規模校での実践にも生かせるよう、それぞれの学級規模に応じた課題についても解決策を探り、指導に役立てていきたい。

（堀之内小学校 山宮将仁）

## 自己肯定感を高め、

### どの子どもにも居心地のよい学級をつくるための研究 —特別活動における開発的・予防的教育相談活動を取り入れた指導を通して—

#### I 主題設定の理由

子どもたちを取り巻く状況は、少子化、情報化が進む中で、大きく変わってきている。社会の変化とともに、子どもたち同士のかかわりも変化してきている。学校生活を送る中で、友だちとのかかわりがストレスになってしまう子どもたちもいる。

少人数の学級の子どもたちは、気心が知れた中で、とても親密であり、互いに助け合っ  
て活動することができる。また、教師の指導や支援もよりきめ細かく行うことができたり、  
全職員でかかわったりすることができる。しかし、人間関係が崩れてしまうと、学級の中  
で逃げ場がなくなってしまうこともある。

そこで、開発的・予防的教育相談活動を通して、自他のよいところを知り、互いに認め  
合うことで自己肯定感が高まり、どの子どもにも居心地のよい学級になることで、いじめ  
や不登校などの問題行動を防ぐことができると思う。

#### II 研究の内容

小学校第4学年の学級活動の時間、朝の会、帰りの会などにおいて、構成的グループエ  
ンカウターのエクササイズの配列を計画し、学習過程で展開することによって、自己肯  
定感を高め、どの子どもにも居心地のよい学級と感じられる人間関係をつくるための研究  
である。

#### III 研究の成果と課題

特別活動において、構成的グループエンカウターを行ったことにより、エクササイズ  
やシェアリングで自分や友だちのよいところや感情を知ることができた。そのことにより、  
新しい概念が生まれ、子どもたちは「自分は、自分なんだ」という意識を高めることがで  
きた。本研究により、自己肯定感が高まり、どの子どもにとっても居心地のよい学級と感  
じられるようになった。

本研究では、朝の会や帰りの会、学級活動の時間に構成的グループエンカウターを行  
ったが、学校教育の中で教科や領域を問わず、年間を通した継続的な取り組みにより、子  
どもたち同士の人間関係がつくられるものと思う。

(牧丘二小学校 藤波 貴)

## 郷土の音楽を取り入れた指導の在り方に関する研究 — 地域に伝わる民謡の教材化を通して —

### I 主題設定の理由

中学校音楽科の学習においては、学校や生徒の実態に応じた幅広い学習の設定が必要となり、我が国の伝統的な音楽に対して理解を深める学習では、身近な地域に伝わる民謡を教材として取り上げることが可能となった。地域に伝わる民謡は身近な音楽として捉えられるため、生徒にとって郷土の文化に対するよさやすばらしさを再認識し、郷土への誇りを持つことができる効果的な教材になると考えた。

### II 研究の内容

#### 1 調査研究の内容

- (1) 地域の音楽科の教員から、日本の伝統音楽や郷土に伝わる音楽の学習について調査し、課題点等を探り、その改善策や解決策を明らかにする。
- (2) 生徒の音楽や民謡に対する意識調査をし、生徒の実態を把握する。それをもとに、学習活動の工夫を図る。

#### 2 教材開発研究の内容

- (1) その時代や地域においてどのように歌われたり演奏されたりしてきたのかを文献から探る。
- (2) 東山梨地域で、現在も伝わる民謡「どっこいしょ節」について調査し、参考資料や音・映像の収集をする。
- (3) 「どっこいしょ節」の三味線譜や箏譜の作成を行う。
- (4) 「民謡MAP」の作成をする。
- (5) 学習指導要領を参考に「日本の音楽」における小・中学校9年間の系統的な学習配当表を作成する。

### III 研究の成果と課題

この研究で、教員の持つ悩みや課題点を知ることができたため、それを解決していきけるような教材を工夫していくことができた。また、生徒の意識・実態を調査したことで、その実態に即した指導の工夫について考察することができた。

さらに、民謡を中心に素材を収集し「民謡MAP」を作成したので、現場で活用し、今後は県内に伝わる郷土芸能の音楽についても収集を行い、その素材集を作成し「郷土の音楽」の学習の場での活用の幅を広げていきたい。

そして、9年間の系統的な学習の流れや民謡を教材とした指導案を作成したので、これをもとに小・中の連携を図りながら「日本の音楽」の学習が進められるように努力していきたい。

(塩山中学校 平山昌実)

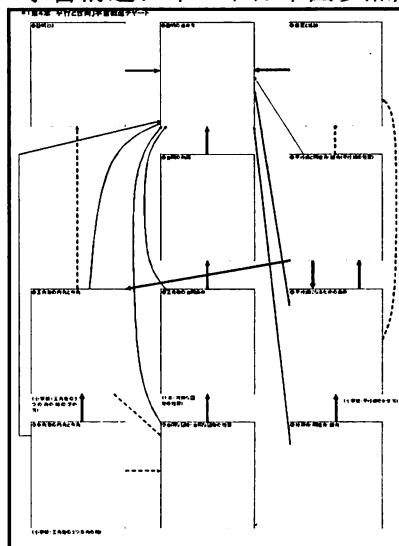
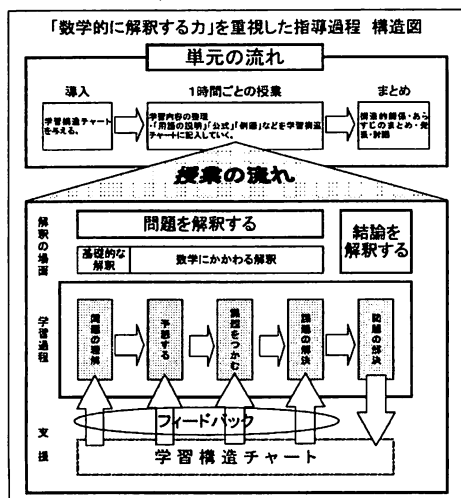
## 数学的に解釈する力を重視した学習指導方法に関する研究 —数学的に解釈することへの支援を取り入れた授業づくり—

### I 主題設定の理由

2004年12月に発表されたPISA2003ならびにTIMSS2003の結果によると、子どもたちの学力に関して「解釈する力（読解力）」「表現力」に課題があることが指摘された。これを受け、文科省では教育活動全般において国語力向上の取り組みを重視する方針を示した。数学科に対しても「数学的に解釈する力の育成を目指した指導を充実する」ことを求めてきた。そこで、この視点から授業の改善を試み、子どもたちの確かな学力の向上と魅力ある数学の授業作りを進めたいと考え、本主題を設定した。

### II 研究の内容

本研究は、数学的に解釈する力を高めるための授業づくりを目標としている。数学的に解釈する力とは、数学科において養うべき「関心・意欲・態度」「見方・考え方」「表現・処理」「知識・理解」を総合したものであり、これを「問題を解釈する力」「結論を解釈する力」の2つに分けてとらえることとした。具体的な方法としては、日々の授業に「学習構造チャート」を活用することと「問題解決の授業」を取り入れた指導モデルを作成し、実践を試みた。（概要ならびに学習構造チャートは下図参照）



### III 研究の成果と課題

実践を通し、本指導モデル、特に学習構造チャートが解釈する力を重視した指導に有効であることが確認できた。問題解決の授業の指導過程においても有効的な活用ができた。数学を苦手にしていたり、嫌っていた生徒たちが好印象をもって取り組んでいた。課題としては、学習構造チャートが学年をまたがったり、複数の単元になった場合の使い方や学習構造チャートと評価とのかかわりがあげられる。これらについて今後も研究・実践を継続していきたいと考える。（山梨南中学校 長坂 俊彦）



## 中学校社会科歴史的分野での 資料活用法についての研究

～大正時代の授業に新聞資料（文字資料）を用いることの有益性について～

### I 主題設定の理由

本研究は、中学校社会科歴史的分野での教材（資料）として、文書資料としての新聞が効果的に生徒に受け入れられるようにするには、どのような方法を用いたらよいかを考察したものである。歴史学習の教材としては、実物・絵画・映像・文書資料等がある。

中学校の歴史授業は通史で行われていて、大正時代は歴史の一つの時代としては短く、大きな変革期ではなかった。故に生徒もその時代の知識をあまり持ちえていない状況である。しかし、大正時代は資本主義が日本に根付いた時期であり、都市では今でと変わらない都市民の生活が始まった時期でもある。また対外的にも第一次世界大戦に参戦している。

近現代史研究において新聞資料は、当時の出来事をより客観的に示すことができる資料である。この資料の性質を生かして資料を厳選し、歴史認識が他の時代より劣ってしまう大正時代の授業に使用していくことで、授業の効率化を図り、生徒自らが考える力を伸ばしていけるようにしていきたい。

### II 研究の内容

大正史全体や近現代史をフィールドにしている、歴史学者の著述によって、授業者が大正史を知るところから始まり、生徒の近現代史認識を把握し、大正史学習の教材作りを行なう。また文書資料にあたる大正時代の新聞から生徒が時代を把握し、考える材料になる記事を集める。そして現在と関連させて時代認識を深めさせることが生徒にとって重要なので、現在のグローバル化した世界との動きと類似点を考察させたりして、歴史的思考力が伸びるような学習指導案を作成し、授業実践していく。

### III 研究の成果と課題

#### 成果

- 1 近現代史を研究している歴史学者の大正史の捉えかたが分かった。大正 15 年という短い期間では、政治動向・経済動向など連鎖して生起してくる歴史は推し量れない。
- 2 生徒の時代意識（時代観）がアンケートの実施とその整理により分かった。その結果、中学 2 年生ではまだ、人物英雄史観にとらわれていることが分かった。
- 3 大正史を生徒に学習させるにあたって、当時の文字資料である新聞（山梨日日新聞）から、教科書の内容記述（文部科学省の学習指導要領で記述されているところの）に合わせ、郷土山梨の産業や政治の特性が現れている記事を現代語訳し、教材化できた。

#### 課題

大正史を 7 時間で授業実践できる学習指導案を作成したが、実践をすることができなかった。実践して初めて資料の選択や構成（教材化）の良し、悪しが判断できるので、今後実践していきたい。

（笛川中学校 澤登正仁）

## 様々なメディアを効果的に 使用した授業と指導法の研究

### I 主題設定の理由

美術の教員として、長年創作活動を通した生徒たちの人間形成に携わってきたが、昨今の技術の進歩やコンピュータの普及などにより、生徒たちを取り巻く状況は刻々と変化を見せている。同時に美術に表現にも多様な変化が生じ、従来の絵画や彫刻作品の枠に収まらない表現も多く見られるようになった。具体的に言うと、設置する場所と、制作したものとの関係性を作品として表現するインスタレーションや、コンピュータグラフィック、アニメーションなどの映像メディア作品、パフォーマンスなど、鑑賞者が実際に参加したり、体験したりできるインタラクティブな表現などである。生徒たちも、生活の中でそういった表現に触れる機会は多く、美術の授業にぜひ取り入れたい表現方法になりつつある。

時間数が限られていて効率的な授業の構築が求められている今、自分が実際に制作する過程を通して、生徒たちにとって魅力があり、かつ、美術でつけられる力を最大限につけることができるような題材や授業の構成について、大学での制作活動を通して研究を深めたいと考え、上記の主題を設定した。

### II 研究の内容

- (1) 大学での講義による活動
- (2) 教育実習生の研究授業参観
- (3) 美術や教育にかかわる文献の調査
- (4) 美術館・ギャラリーでの作品鑑賞

### III 成果と課題

学部・大学院の講義ともに、実技を中心に受講して、院生や学部生と同じく作品制作・レポート・プレゼンテーション・ディスカッション・パフォーマンスなどを行ってきた。

久しぶりに、教える立場から教えていただく立場になり、様々なことを発見できる毎日を過ごすことができた。本格的な作品制作も久々なので、いまさらながら表現の難しさ、奥の深さや楽しさを再確認している。絵画や彫塑、工芸の制作もちろんだが、インスタレーションや文字から発想して行うパフォーマンス・即興制作、演劇や舞踏などの身体表現など、現代美術のさまざまなメディアを使用した表現を実際に行うことができたのは大きな収穫である。実技の講義は、自分の満足いくものを作ろうと思うと、どうしても講義の時間だけでは足りない。しかし、やればやっただけ返ってくるので、そういう苦しさや楽しさを十分実感し、自分の美術の授業に反映させていきたいと思っている。

(塩山中学校 小澤 朋子)

## 不登校傾向にある生徒への芸術的な関わり方の研究

### I 主題設定の理由

中学校教育に従事し、二十数年来音楽教育を通して「心豊かな心身の育成」や「生涯豊かな音楽ライフを目指して」を念頭に置きながら様々な指導法の工夫や改善を行い、自分なりの指導法にいかしてきた。そんな折り学年主任などの立場から学年や学校全体に視野を向けると、社会や家庭環境の急激な変化により無気力感を漂わせたり、不登校に陥る生徒と接触する機会も増えてきた。教職に身を置いたときから音楽教育を通して、様々な方面から生徒にアプローチしていこうと考えてきたことを思い起こし、保健室登校児に対して自立訓練を基本とした音楽活動を実施しながら、可能な限りこの生徒の周囲に存在する人間に対しても肯定的な対人交流が図れるよう療育的音楽教育を実施することを目指して、本研修のテーマとして上記を設定した。

### II 研究の内容

- 1 音楽教育者の立場から、学校教育の中で療育的音楽教育はどのような形で係わることが可能かを探る。
- 2 言語的コミュニケーションが図れなくなった友人関係等に関して、言語的コミュニケーションを通して肯定的な対人関係を得るきっかけに音楽はなりうるか。
- 3 日本における効果的な療育的音楽教育の現状把握とそのあり方。  
(調査及び研究の視点)
  - ① 不登校傾向にある生徒との芸術的関わり方に関する現状の把握。
  - ② 不登校傾向にある生徒との芸術的関わり方に関する論理及びその教授法と指導法。
  - ③ 不登校傾向にある生徒との芸術的関わり方に関する現場の見学と研修。
  - ④ 音楽療法に用いられる楽器の演習。
  - ⑤ 医療現場と教育現場における音楽療法の実際に着いての把握。

### III 成果と課題

療育的音楽教育は医療機関や教育現場において、その有効性について認知されて久しい。しかしながらその専門的な分野は奥が深く実に興味深いものであった。

現場を離れこのような機会を頂いた関係各位に深い感謝の念を抱きながら、不登校生徒や職場の先生方に研修を徹して得た事柄を還元していこうと、その職責を痛感している。なにより、生徒との人間的なふれあいを根幹とすることにこの音楽療育のベースがあることを大切にしながら・・・

(松里中学校 藤木篤子)

## 平成17年度東山梨地区教育委員会連合会事業報告

年月日	事業名	内 容	備 考
17. 5.10	代表者会議	春季定期総会の日程及び提出議案について 被表彰者の選考について	東山梨合同 庁舎会議室
	教育長部会	平成16年度事業報告及び決算報告について 平成17年度事業計画案及び予算案について 県教育委員会への要望事項について 峡東地域教科書採択協議会について 心身障害児適正就学指導協議会総会	
17. 5.19 ～ 20	関ブロ総会・研 究大会	関東ブロック市町村教育委員会連合会総会並びに 研究大会参加	東京都多摩市
17. 5.27	春季定期総会	平成16年度事業報告及び決算報告について 平成17年度事業計画案及び予算案について 県教育委員会への要望事項について 感謝状の贈呈	東山梨合同 庁舎会議室
17. 5.30	県連研修会	山梨県市町村教育委員会連合会春季研修会参加	総合教育センター
17. 8.22	県連要望活動	県教育委員会への要望活動（要望書の提出）	県教育委員会
17. 9. 5	教育を語る会	山梨県「教育を語る会」へ出席	自治会館
17. 9.13	一日教育委員会	峡東地域「一日教育委員会」へ出席	桃の里文化館
17.10. 3	代表者会議	秋季定期総会の日程及び提出議案について 役員の選出について 被表彰者の選考について	東山梨合同 庁舎会議室
	教育長部会	平成17年度教育長部会の役員選出について 平成17年度県外研修について 心身障害児適正就学指導協議会総会	
17.10.19	秋季定期総会	平成17年度会務中間報告及び今後の予定について 役員の承認について 感謝状の贈呈	東山梨合同 庁舎会議室
17.11.28	県連研修会	山梨県市町村教育委員会連合会秋季研修会参加	総合教育センター

年月日	事業名	内 容	備 考
18. 2.13	教育を語る会	山梨県「教育を語る会」へ出席	自治会館
18. 1.27	年度末人事 ヒアリング	第1回市教育委員会ヒアリング	東山梨合同 庁舎会議室
18. 2.20		第2回市教育委員会ヒアリング	
18. 3.13 ～ 14		市教育委員会最終調整	
18. 3.15	年度末人事	人事異動事務作業	東山梨合同 庁舎会議室

### 東山梨地区教育委員会連合会会員名簿

教育委員会名	氏 名	備 考
山梨市教育委員会	荻原昌郎	監事
山梨市教育委員会	日原吉日出	
山梨市教育委員会	手塚光彰	
山梨市教育委員会	武井尚子	
山梨市教育委員会	堀内邦満	副会長・教育長部会会長
甲州市教育委員会	天野昌明	会長
甲州市教育委員会	宮崎秀子	
甲州市教育委員会	清雲俊元	
甲州市教育委員会	荻原更一	
甲州市教育委員会	古屋正吾	教育長部会副部会長
峡東教育事務所	保坂一仁	参与